

神栖市におけるペットロスの現状と課題

Current Status and Issues of Pet Loss in Kamisu City

増田 翔¹⁾・小沼 守²⁾・内川 隆一²⁾

Kakeru MASUDA¹⁾, Mamoru ONUMA²⁾ and Ryuichi UCHIKAWA²⁾

平成23年度の保健所への犬の収容数、殺処分数1位の茨城県神栖市は、放置便や放し飼いが多く、飼い主のモラルが低い可能性が示唆されている。よって神栖市で飼い主の意識調査をすることによりペットロスに地域性があるか調査した。材料は2016年と2017年に神栖市で開催された「かみすフェスタ2016・2017」(神栖群)の来場者および対照群として本学の茨城県外出身者に対しアンケート調査を実施した。結果、対照群に比べ神栖群は、飼育方法では室外飼育、死亡原因では行方不明が多く、入手方法においても拾ったものが多かった。さらに、神栖群は対照群に比べ、悲嘆反応に有意差が得られた。以上により神栖市の飼い主には飼育の意識や関心の低さが関連していることが示唆されたため、ペットロスに地域性のある可能性が示唆された。今後は、犬猫の収容数、殺処分数を減らすためにも、神栖市において動物の適正な取扱いに関して行政や教育機関から有益な施策の執行が望まれる

【緒言】

人間が動物と共に暮らしてきた歴史は極めて長く、人間の生活に利用する家畜として飼育するという対象から、可愛がり、時に慰みに動物を飼育する対象に変わり、現在のペットとなっている¹⁾。また、心臓血管系疾患により入院した患者の一年後の死亡率がペット非飼育者では28.2%で、ペット飼育者では5.7%と明らかにペットの癒し効果が高いことが報告されている³⁾。社会福祉従事者1000人以上の大規模な調査で「愛情を込めて育てているペットと飼い主との関係は家族だと思うか」という質問に対し、「家族だ」または「どちらかといえば家族だ」を合わせて65%が家族と認知していた²⁾。

このようにペットには癒し効果があり、現在はペットを家族の一員としてみる人も多い。しかし家族の一員として関係が深くなったため、ペットの喪失が親族や友人

を失ったのと同様の悲嘆を生じさせることがあり、この悲嘆反応をペットロスといわれている⁴⁾。また、ペットの喪失による悲嘆反応が蔓延化した場合に認められる心身両面の障害はペットロス症候群ともいわれている⁵⁾。ただし飼い主の飼育意識が低い場合はペットロスまたはペットロス症候群が少ない可能性がある。

今回、平成23年度の犬の収容数、殺処分数1位⁶⁾で、放置便や放し飼いが多く、飼い主のモラルが低い可能性がある茨城県神栖市⁸⁾で飼い主の意識調査をすることにより、ペットロスの地域性が明らかになると考えられたため調査を実施した。

【材料と方法】

対象

2016年の10月15・16日と2017年の10月14・15日に茨城県神栖市で行われた「かみすフェスタ2016・2017」の動物愛護推進事業のイベントブース来場者のうち、ペット喪失経験者を対象にアンケートを行い、2016年57例、2017年66例で調査した(神栖群)。また、比較対象として2017年12月に本学の茨城県出身者以外の生徒および教員51人にアンケートを行い、その内、ペット喪失経験者21例を調査した(対照群)。

連絡先：小沼 守 monuma@cis.ac.jp

2) 千葉科学大学危機管理学部動物危機管理学科

Department of Animal Risk Management, Faculty of Risk and Crisis Management, Chiba Institute of Science

1) 株式会社リジョイスカンパニー (既卒者)

Rejoice Company Co., Ltd.

(2018年9月13日受付, 2018年11月7日受理)

方法

調査票は無記名による選択および自由記述式質問用紙を用いた。いずれも年齢、性別、犬または猫の飼育経験および喪失経験の有無、喪失の原因といった設問を、喪失経験のある対象者に限り調査した。また、2016年には神栖市での、入手場所、飼育場所を求めた。なお、喪失原因の行方不明は、すべての経験者が1年以上経過していたため、行方不明期間を1年以上とした。

また、喪失を受容する過程で複数の感情が現れ、喪失後の感情としては後悔や罪悪感、否認、喪失感、無感覚、安堵などが挙げられる⁶⁾。そこで2017年調査ではこれらを参考に、喪失直後は「悲しい」、「何も考えられない」、「悔しい」、「心配である」とし、現在の感情では「感謝」、「会いたい」、「悲しい」、「寂しい」、「悔しい」の項目を喪失後の項目とし、その数を用い対象群と比較分析した。

なお、2017年調査において2016年の対象者、および回答数が多く解析が困難となった犬猫の複数喪失経験者は対象から除外した。また、ペットの喪失による悲嘆反応をペットロス、それが蔓延化した場合に認められる心身両面の障害をペットロス症候群であるが⁵⁾、本調査では心身両面に対する悲嘆反応を調査することが困難であったため、ペットの喪失の悲嘆反応を調査した。

解析

2017年の神栖群65例と対照群21例のアンケート項目内にある悲嘆反応数の有意差を確認するためにそれぞれ数値化した。解析には、BellCurve for Excel, version 2.15 (Social Survey Research Information Co., Ltd.)を用いた。

【結果】

2016年、2017年に行われた調査において、アンケートの回答者数は2016年が67人、2017年が87人の計154人であった。その内、犬猫の喪失経験者は2016年が57人、2017年が66人を神栖群とした。その内、回答の内容や無記入などにより解析が困難となった対象者は、2016年は7例、2017年は1例であり、それらを除外した結果、神栖群として2016年は50例、2017年は65例となった。

神栖市群は、2016年は10-29歳が20.0% (10/50) で、30-49歳が44% (22/50)、50歳以上が42% (21/50) で、2017年は10-29歳が16.7% (11/65) で、30-49歳が51.6% (34/65)、50歳以上が30.3% (20/65)、対照群では10-29歳が95.2% (20/21) で、30-49歳が0% (0/21)、50歳以上が4.8% (1/21) であった (表1)。なお、神栖群は30歳以上が86%、対照群は29歳以下が95.2%となった。また、性別としては、対照群では女性57.1% (12/21)、男性42.9% (9/21) であったが、2016年は女性72% (36/50)、男性28% (14/50)、2017年は女性86.2% (56/65)、男性13.8% (9/65) であった (表1)。以上により年齢および性差に関しては大きな偏りがあつた。

2016年調査

飼育および入手の方法

飼育場所では犬は室外飼育が56.4% (22/39) と多く、猫は室内飼育が63.6% (7/11) と多かった。入手方法では購入の割合が犬は33.3% (13/39) に対し猫は18.2%と低かった (表2)。

表1. 神栖群、対照群における年齢および性差

	神栖群2016		神栖群2017		対照群		
	n	%	n	%	n	%	
年齢	10-29歳	10/50	20	11/65	16.7	20/21	95.2
	30-49歳	22/50	44	34/65	51.6	0/21	0
	50歳以上	21/50	42	20/65	30.3	1/21	4.8
性差	女性	36/50	72	56/65	86.2	12/21	57.1
	男性	14/50	28	9/65	13.8	9/21	42.9

表2. 飼育および入手方法

動物種	飼育者数	飼育方法						入手方法							
		屋外	%	屋内	%	屋内外	%	購入	%	譲り受けた	%	拾った	%	不明	%
犬	39	22	56.4	12	30.8	5	12.8	13	33.3	12	30.8	13	33.3	1	2.6
猫	11	0	0	7	63.6	4	36.4	2	18.2	5	45.5	4	36.4	0	0
計	50	22	44	19	38	9	18	15	30	17	34	17	34	1	2

飼育方法と喪失原因

病死では屋外飼育が62.5% (15/24) と最も多く、次いで両方が20.8% (5/24) であった。老衰は室内飼育が58.8% (10/17) で最も多く、次いで屋外飼育が29.4% (5/17) であった。行方不明、事故はいずれでもあった(表3)。

2017年調査

喪失原因別の喪失感情

喪失原因別の喪失感情は、喪失直後において「悲しい」の感情が病死 96.7% (29/30)、老衰 85.7% (6/7)、事故死 88.9% (8/9)、行方不明 63.2% (12/19) であった。老衰、事故死では「悔しい」という感情がなく、行方不明において、直後は「悲しい」に次いで「心配し

た」が 31.6% (6/19) であった。現在の感情においては病死、行方不明はすべての項目があったが、老衰では「悲しい」、「寂しい」、「悔しい」の感情がなく、事故死では「悲しい」という感情のみなかった(表4)。

喪失からの経時的な感情の変化

喪失から1年以下では「悔しい」のみ見られなかった。2年以上5年以下では「会いたい」という感情が47.4% (9/19) 最も多く次いで「感謝」、「悔しい」が26.3% (5/19) であった。6年以上10年以下では、「感謝している」が55.6% (10/18) で、次いで「会いたい」が27.8% (5/18) であった。11年以上では「会いたい」が50.0% (9/18) で、感謝が44.4% (8/18) であった(表5)。

表3. 飼育方法と喪失原因

	人数	屋外	%	室内	%	室内外	%
病死	24	15	62.5	4	16.7	5	20.8
老衰	17	5	29.4	10	58.8	2	11.8
行方不明	5	1	20	3	60	1	20
事故	4	1	25	2	50	1	25
計	50	22	44	19	38	9	18

表4. 喪失原因別の喪失感情

原因	人数	喪失直後の感情										現在の感情									
		悲しかった %	何事も思えない %	残念 %	悔しい %	心配である %	感謝 %	会いたい %	悲しい %	寂しい %	悔しい %										
病死	30	29	96.7	4	13.3	4	13.3	3	10.0	0	0.0	12	40.0	11	36.7	5	16.7	4	13.3	6	20.0
老衰	7	6	85.7	1	14.3	2	28.6	0	0.0	0	0.0	4	57.1	3	42.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0
行方不明	19	12	63.2	1	5.3	4	21.1	3	15.8	6	31.6	5	26.3	7	36.8	3	15.8	7	36.8	4	21.1
事故死	9	8	88.9	2	22.2	2	22.2	0	0.0	0	0.0	4	44.4	2	22.2	0	0.0	1	11.1	2	22.2
計	65	55	84.6	8	12.3	12	18.5	6	9.2	6	9.2	25	38.5	23	35.4	8	12.3	12	18.5	12	18.5
対照群*																					
病死	9	7	77.8	1	11.1	1	11.1	2	22.2	1	11.1	4	44.4	4	44.4	3	33.3	2	22.2	2	22.2
老衰	7	7	100.0	1	14.3	2	28.6	4	57.1	0	0.0	4	57.1	6	85.7	2	28.6	3	42.9	2	28.6
行方不明	1	1	100.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	1	100.0
事故死	2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	100.0	0	0.0	0	0.0	1	50.0	0	0.0	0	0.0	2	100.0
その他	2	2	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
計	21	17	81.0	2	9.5	3	14.3	9	42.9	1	4.8	10	47.6	12	57.1	5	23.8	5	23.8	7	33.3

* 対照群の「喪失直後の感情」および「現在の感情」における「その他」1例は除く

表5. 喪失後の年数と喪失原因および現在の感情

年数	人数	喪失の原因								現在の感情									
		病死 %	老衰 %	行方不明 %	事故 %	感謝 %	会いたい %	悲しい %	寂しい %	悔しい %									
≤1	10	7	70.0	2	20.0	0	0.0	1	10	3	30.0	2	20.0	1	10.0	2	20.0	0	0.0
1<5	19	8	42.1	2	10.5	5	26.3	4	21.1	5	26.3	9	47.4	3	15.8	3	15.8	5	26.3
5<10	18	10	55.6	2	11.1	4	22.2	2	11.1	10	55.6	5	27.8	3	16.7	2	11.1	4	22.2
10>	18	5	27.8	1	5.6	10	55.6	2	11.1	8	44.4	9	50.0	4	22.2	6	33.3	6	33.3
計	65	30	46.2	7	10.8	19	29.2	9	13.8	26	40	25	38.5	11	16.9	13	20	15	23.1
対照群*																			
≤1	3	2	66.7	1	33.3	0	0.0	0	0	2	66.7	2	66.7	0	0.0	0	0.0	1	33.3
1<5	7	5	71.4	2	28.6	0	0.0	0	0.0	4	57.1	5	71.4	1	14.3	3	42.9	1	14.3
5<10	7	1	14.3	1	14.3	2	28.6	2	28.6	2	28.6	3	42.9	3	42.9	1	14.3	3	42.9
10>	4	2	50.0	1	25.0	0	0.0	0	0.0	1	25.0	2	50.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
計	21	10	47.6	5	23.8	2	9.5	2	9.5	9	42.9	12	57.1	4	19	4	19	5	23.8

* 対照群における「喪失の原因」および「現在の感情」における「その他」2例は除く

解析

神栖群と対象群における悲嘆反応数は、神栖群は幅0-5、平均1.4、中央値1、であり、対照群は幅1-5、平均2、中央値3であった(表6)。また、これらの差異を、2群の特徴である非正規分布で非等分散からnonparametric検定のBrunner-Munzel検定で解析した。加えて小標本のため正規化検定だけでなく、補正した自由度を用いたt検定も行った。

結果、神栖市群と対照群における悲嘆反応数の差異は、平均値および中央値いずれにおいても神栖群が低い傾向で、2群の比較においては、正規化検定 ($P=0.0248$) および補正した自由度を用いた t 検定 ($P=0.0325$)、いずれにおいても有意差が得られた ($P < 0.05$)。

表6. 神栖群と対照群における悲嘆反応数

	n	幅	平均値*	中央値
神栖群	65	0-5	1.4	1
対照群	21	1-5	2	3

*2群で有意差あり ($P < 0.05$)

【考察】

対象者

ペットロスの意識調査において、対象者は女性が多い¹⁰⁾が、本調査においても同様の結果となった。女性の対象者が過半数となつてしまい、性差を出すことができなかった。さらに年齢にも偏りが出てしまったため、性差および年齢差が言及できなかった。

神栖市での犬猫の飼育方法および入手方法

飼育方法は、犬猫飼育率全国調査¹¹⁾に比べ、犬の室内飼育が73.3%であったが、本調査では屋外飼育が半数以上を占めていた。喪失の原因に関しては事故、行方不明が屋外飼育だけでなく室内飼育においても見られた。これは散歩時、一部の飼い主がリードを着用しない場合があるという報告⁸⁾に関係している可能性がある。よってこれらが放し飼いや放置便といった問題にもつながり、内川らの報告⁸⁾同様、神栖市の飼い主の意識の低さにつながっている可能性がある。

また、入手方法では環境省が行った一般市民へのアンケート調査¹²⁾に比べ、犬は購入より拾った割合が高かった¹²⁾。これら結果は、地域性が関与していると考えられるが、購入した場合に比べ、ペットへの低い依存度につながる可能性もある。

なお、猫については、飼育方法および入手方法では大きな違いが見られなかった。

喪失原因による悲嘆反応

喪失原因において病死や老衰と比べ行方不明は悲嘆反応が強く現れる¹³⁾。行方不明になった場合も亡くなったのと同様の悲嘆が起こり、多くの飼い主は実際に死体を見たり葬儀をしたりすることで死を受け入れる機会がない為、はるかに苦しいといわれている¹³⁾。しかしながら本調査では行方不明経験者との喪失原因者と比較しても違いは見られなかった。これは行方不明になった時点で死をすぐに受け入れている、つまり行方不明になった場合は仕方がないという感情が背景にある可能性が示唆される。

また、2017年の調査において、神栖群と対照群における悲嘆反応数は、平均値および中央値いずれにおいても神栖群が低い傾向で、しかも2群で有意差が得られたため、神栖市の飼育者の方がペット喪失による悲嘆反応が低い可能性がある。

ペットロスに対する医師の介入

ペットを喪失して2カ月後で56.7%、4カ月後で40.7%が医師による介入の必要性が示唆されている¹⁰⁾。茨城県は日本全国において精神科の入院受療率と外来受療率が最も低く、精神科医師数、病院数、診療所数も最低数第2位である⁷⁾。そのため全精神患者数が少ないという地域性や、潜在的なペットロス症候群患者数が反映されていない可能性もあるが、ペットロス症候群となった飼い主が少ない可能性もある。

【まとめ】

今回の調査で、全国調査に比べ、飼育方法では屋外飼育、死亡原因では行方不明が多く、入手方法においても拾ったものが多かった。さらに、神栖群は対照群に比べ、悲嘆反応に有意差が得られた。また、全国では犬猫の収容数、殺処分数ともに減少しているが、神栖市は現在も全国に比べこれらが多い。これら結果は、神栖市の飼い主には飼育の意識や関心の低さが関連していることが示唆される。

今後は、犬猫の収容数、殺処分数を減らすためにも、神栖市において動物の適正な取扱いその他動物の健康及び安全の保持など、生命尊重、友愛及び平和の情操の涵養に資するとともに、人と動物の共生する社会の実現を図るため、行政や教育機関から有益な施策の執行が望まれる。さらに本学においては神栖市と同様の課題を持つ市町村に対し、本学科の特徴を生かした動物愛護精神を持ち合わせた卒業生を多く輩出する責任があると考えられた。

参考文献

- 1) 浅川潔司, 佐野智子, 古川雅文, 東由佳, 森田恵子: ペット動物の癒しの効果に関する健康心理学的研究. 兵庫教育大学研究紀要. 20: 115-119. 1999.
- 2) 杉田陽出: 犬の飼育と犬に対する愛着度が飼い主の身体的健康と精神的健康に及ぼす効果. JGSS research series 2 (東京大学社会科学研究所資料第 22 集). 127-143. 2003.
- 3) Friedmann E, Katcher AH, Lynch JJ, Thomas SA: Animal companions and one-year survival of patients after discharge from a coronary care unit. *Public Health Rep.* 95 (4): 307-312. 1980.
- 4) 宇都宮直子: ペットと日本人, 文春新書 (075). 文藝春秋, 東京, 1999.
- 5) 小杉正太郎: ペットロスに関する心理学的検討. *Animal Nursing.* 7(2): 8-13. 2002.
- 6) 木村祐哉: ペットロスに伴う悲嘆反応とその支援のあり方. *心身医.* 49(5): 357-361. 2009.
- 7) 厚生労働省: 都道府県別にみた人口 10 万対病院病床数, 平成 26 年 (2014) 医療施設 (静態・動態) 調査・病院報告の概況, URL; www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000028siuat-t/2r98520000028syn.pdf, (2017-12-20)
- 8) 内川隆一, 神田あゆみ, 古口美雪, 森奈津子, 菅原裕, 棟方早希: 銚子市および神栖市の小・中・高校生のペット飼養に対する意識調査-II. 野良犬, 野良猫の現状と飼い主のモラルについて-. 千葉科学大学紀要. 第 7 号. 87-96. 2014.
- 9) 地球生物会議 ALIVE: 全国動物行政アンケート結果報告書, 平成 23 年度版, ALIVE 資料集, No. 33, pp80. 2013.
- 10) 木村祐哉, 金井一享, 伊藤直之, 堀 泰智, 星 史雄, 川畑秀信, 前沢政次: ペットロスに伴う死別反応から医師の介入を要する精神疾患を生じる飼い主の割合. *J Vet Epidemiol.* 20(1): 59-65. 2016.
- 11) 一般社団法人ペットフード協会: 犬猫全国飼育率調査 (2011), URL; <http://www.petfood.or.jp/data/chart2009/index.html>, (2017-12-15)
- 12) 環境省: 一般市民へのアンケート調査結果 (2011), URL; https://www.env.go.jp/council/14animal/y140-33/mat02_2.pdf, (2017-12-15)
- 13) Moira-Andeason: 苦しみの不意打ち - ペットが行方不明になるとき-, *In*: ペットロスの心理学. 小杉正太郎, 桜井富士郎, 廣川智子訳. pp145-149. インターズー, 東京. 2001.

参考文献

- 1) 浅川潔司, 佐野智子, 古川雅文, 東由佳, 森田恵子: ペット動物の癒しの効果に関する健康心理学的研究. 兵庫教育大学研究紀要. 20: 115-119. 1999.
- 2) 杉田陽出: 犬の飼育と犬に対する愛着度が飼い主の身体的健康と精神的健康に及ぼす効果. JGSS research series 2 (東京大学社会科学研究所資料第 22 集). 127-143. 2003.
- 3) Friedmann E, Katcher AH, Lynch JJ, Thomas SA: Animal companions and one-year survival of patients after discharge from a coronary care unit. *Public Health Rep.* 95 (4): 307-312. 1980.
- 4) 宇都宮直子: ペットと日本人, 文春新書 (075). 文藝春秋, 東京, 1999.
- 5) 小杉正太郎: ペットロスに関する心理学的検討. *Animal Nursing.* 7(2): 8-13. 2002.
- 6) 木村祐哉: ペットロスに伴う悲嘆反応とその支援のあり方. *心身医.* 49 (5): 357-361. 2009.
- 7) 厚生労働省: 都道府県別にみた人口10万対病院病床数, 平成26年 (2014) 医療施設 (静態・動態) 調査・病院報告の概況, URL; www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000028siuat-t/2r98520000028syn.pdf, (2017-12-20)
- 8) 内川隆一, 神田あゆみ, 古口美雪, 森奈津子, 菅原裕, 棟方早希: 銚子市および神栖市の小・中・高校生のペット飼養に対する意識調査-II. 野良犬, 野良猫の現状と飼い主のモラルについて-. 千葉科学大学紀要. 第7号. 87-96. 2014.
- 9) 地球生物会議ALIVE: 全国動物行政アンケート結果報告書, 平成23年度版, ALIVE資料集, No. 33, pp80. 2013.
- 10) 木村祐哉, 金井一享, 伊藤直之, 堀 泰智, 星 史雄, 川畑秀信, 前沢政次: ペットロスに伴う死別反応から医師の介入を要する精神疾患を生じる飼い主の割合. *J Vet Epidemiol.* 20(1): 59-65. 2016.
- 11) 一般社団法人ペットフード協会: 犬猫全国飼育率調査 (2011), URL; <http://www.petfood.or.jp/data/chart2009/index.html>, (2017-12-15)
- 12) 環境省: 一般市民へのアンケート調査結果 (2011), URL; https://www.env.go.jp/council/14animal/y140-33/mat02_2.pdf, (2017-12-15)
- 13) Moira-Andeason: 苦しみの不意打ち-ペットが行方不明になるとき-, *In*: ペットロスの心理学. 小杉正太郎, 桜井富士郎, 廣川智子訳. pp145-149. インターズー, 東京. 2001.